



グローバルの現場から

Discovery beyond borders

学校法人佐野学園 神田外語キャリアカレッジ
代表 仲 栄司

第 9 回

日本とは違う環境で気をつけることは？

「今、謝ったよね。『Sorry』って言ったよね」

「言ったけど、それは事故になってしまったことに
対して言っただけ」

「いやいや、『Sorry』は自分の非を認めたってこと
だよ。こっちは悪くないからね」

「いや、ちゃんと車線変更の合図は出したよ。それ
にバックミラーで確認した時は後ろにいなかった。急
に出てきたんじゃないの」

「そんなことない。あなたが認めたように、こっ
ちは何も悪くないからね」

安易な「Sorry」は禁句

ドイツ、ミュンヘンに赴任してすぐの出来事でした。
バックミラーで確認して後方に車がいなかったので、
私は右に合図を出して2、3秒後に車線変更をしまし
ました。「ボン！」と音がした時、「えっ、何で？」と思
いました。曲がる時にもう一度確認すべきでしたが、夜
で車も少なかったので、つい確認を怠ったのです。

「海外では、『Sorry』と言うと自分の非を認めたこ
とになる、だから、余程のことがない限り言わないよ
うに」とよく言われていたのですが、右車線に入る時
に確認を怠ったことと相手の車を傷つけたことに、申
し訳ないという気持ちが先だって、私は思わず
「Sorry」と言ってしまいました。

2日後に重要な展示会を控えていたこともあり、私
は、「わかった、わかった。こっちは悪いから車の傷
の修理代金は払う。それで終わりにしよう」というこ

とで決着させました。赴任早々、問題をこじらせたく
なかったですし、何より、日本本社も関わる展示会で、
自分が責任者だったので、影響がないように早く対処
しようという思いが強くあったのです。

相手は、私の言葉にすぐに同意してきました。相手
側の車はかなりのスピードを出していたので、そこを
突かれると「うまくない」と思ったのでしょうか。そう
した相手の考えはわかっていたのですが、私はすぐに決
着させることを優先しました。「Sorry」と言ってしま
ったことがすべての敗因でした。

相手にスキをみせないように

イタリアのガソリンスタンドでガソリンを入れて、
10万リラ紙幣（当時のイタリアの通貨）で代金を支払
った時のことです。お金を受け取った女性はなかなか
おつりを持って現れません。ようやく戻ってきた時に
渡されたおつりが違っていたので、私は「おつりが少
ないよ」と言いました。すると、女性は急にわめき出
しました。「おう、この日本人は嘘つきだ！ 5万リ
ラしか払わなかったのに、10万リラ払ったと言って
ごまかそうとしている」と。

女性は私をスタンドに連れて行き、机の抽斗を開け
て、「ほれ、見てみる。10万リラ紙幣なんてないだろ
う。ここにある5万リラ紙幣こそ、あなたが払ったお
金だ」と言い張るのです。5万と10万の紙幣では色も
数字も違うので、間違えるはずもないのですが、女性
はただただ「Oh, Mamma mia！」と叫ぶだけ。私は

とうとう根負けしてしまいました。「わかった、わかった」と言って、しぶしぶ差し出されたおつりをポケットにしまい込みました。

甘言には最大の注意を

最後はフィリピンでの事件です。月曜日の朝のホテルのロビー。私はそのホテルに宿泊した日本からの出張者と待ち合わせをしていたのですが、なかなか相手が現れません。嫌な予感が走りました。

すぐにホテルのフロントに頼んで、部屋を開けてもらいましたが、もぬけの殻。寝た形跡がないのです。その頃に流行っていた睡眠薬強盗にあったのなら、遅くとも午前中には帰ってくるはずと思い、午前中いっぱい待ちましたが、帰ってきません。誘拐ならとくに脅迫電話がきているはず。私は、これは殺人事件ではないかと本気で考えはじめました。明日の新聞には、「マニラ湾に日本人の死体発見」と出るかもしれない。ああ、とうとう事件に遭遇してしまった」と思い、午後になって、警察に届け出ました。

と、その帰りに、ホテルから電話が入りました。「帰ってきましたよ！」と。私は思わず、「ほんと？ 怪我してない？」と聞きました。「大丈夫」と言うホテルの人の言葉を信じ、急ぎホテルへ戻りました。

さっそく本人に聞くと、「『観光案内してやる』と言って日本の芸能人に似たフィリピン人が笑顔で近づいてきたので、案内してもらった。途中、喉が渴いたのでお店でコーラを飲んだら、その直後、頭がくらくらして、気がつくとなつた家だった。家族がたくさんいて、食事をしていけと言われたので、ご馳走になった。そのあと法外なお金を要求されたが、十分なお金がなかったので、その日は軟禁され、翌日、銀行に連れて行かれて、お金を引き出した。最後は、タクシー代だけ渡されて、解放された」とのこと。そんな大変な目に



仲 栄司
Naka Eiji

大学でドイツ語を学び、1982年、NECに入社。退職まで海外事業に携わり、ドイツ、イタリア、フィリピン、シンガポールに駐在。NEC退職後、国立研究開発法人NEDOにて日本企業の海外企業とのイノベーションプロジェクトの支援に取組み、2021年4月に神田外語キャリアカレッジへ入社。現在は、代表として顧客企業の業務・ビジネス推進と人材の活性化を目指して活動。

今月の ワンフレーズ



Be careful because you
don't know what will happen.

何が起こるか分からない、注意しよう

身を守るためにも、心がけておきましょう。

あっても、彼は「あの人は優しく、いい人だった」と言うのです。

お金を取られても、相手をまったく疑っていないことに驚きました。家族ぐるみで騙されたことは明白だということに、です。私は、「この人はまた引っ掛かるな」と思いました。

危険に対する感覚を研ぎ澄ませる

日本とは慣習や価値観などが違う海外では、いろいろな落とし穴が待っています。言葉一つ、行動一つでトラブルに巻き込まれる可能性は、日本にいる時よりも高くなると思っておいたほうがよいでしょう。

海外に行く際には、外務省の海外安全情報を常にチェックすること。そのうえで、「君子危うきに近寄らず」です。ねらわれたらおしまい。ポケットから財布が出ている状態で写真を撮っている日本人観光客を見ると、まったく警戒心がないと思います。派手な格好をして目立つことも慎むべきです。

地元の人のお話をよく聞き、危険な場所やうかつな行動は避けるといった注意が必要です。要は、「ここは日本とは違う」「危険は身近にある」「何が起こるか分からない」(I don't know what will happen) という意識をもって行動することが肝要です。 ■